ライフ イズ ライク アドリーム

「まるで夢のようだね…」
認知症の日々を生きる妻に、夫が語りかける。二人はうなずき合う。この映画は、認知症のドキュメンタリーというよりも、病を経て絆を深める、ある夫婦の愛の物語である。

2011年3月11日。東日本大震災のその日、
私はひとりの友人の話を聞くために、高知県南国市にいた。友人の名は石本浩市（62才）、ふるさとのその地で小児科を開業する医師である。
十数年前、小児がんの子どもたちのキャンプで出逢い、10年がかりで『風のかたち』という映画を製作した仲間だ。その日、石本さんが語ったのは、小児がんの話ではなかった。
――レビー小体型認知症。それが、彼の妻の病名だった。

妻・石本弥生さんは、石本さんとは幼なじみ。50代から若年性の認知症となり、10年間、石本夫妻は病との斗いに明け暮れて来た。小児がん治療と地域医療の取り組み、妻・弥生さんの認知症との格闘、決してキレイゴトでは片付けられない日々…。石本さんは、医師ならではの観察眼で、弥生さんの発症以来の日常を、まるでカルテを書くように、こと細かに記録していた。

認知症が進行し、今では身の回りのことがほとんど何も出来なくなった弥生さん…。
その弥生さんに深い愛情を寄せケアする石本さん、家族、親戚、地域の人々。
映画「妻の病 –レビー小体型認知症–」は、四国・南国市の豊かな自然に育まれ、支えあうように生きて来た一人の医師と、認知症の日々を生きる妻との、10年間に及ぶ“いのち”を巡る物語である。

「生きなきゃ…　ふたりで よう頑張ったと思う。」
「うん、生きなきゃ。」

（演出・伊勢真一）

伊勢 真一（いせ しんいち）
ドキュメンタリー映像作家。1949年東京都生まれ。「奈緒ちゃん」「えんとこ」をはじめ、数多くのヒューマンドキュメンタリーを製作。近年は若手の作品プロデュースも積極的に手がけている。「風のかたち」文化庁映画賞・カトリック映画賞受賞、「大丈夫。」キネマ旬報文化映画第1位、「傍（かたわら）」キネマ旬報文化映画第6位。2012年日本映画ペンクラブ功労賞、2013年度シネマ夢倶楽部賞受賞。

石本 浩市（いしもと こういち）小児科医
1951年高知県南国市生まれ。順天堂大学医学部卒業、小児科医となる。小児がん医療に取り組み、最前線で活躍。2001年に故郷・南国市へ戻り「あけぼの小児クリニック」を開業、地域医療に取り組む。10年間に及ぶ妻・弥生さんの病との日々を生きてきた。

石本 弥生（いしもと やよい）石本さんの妻
石本浩市さんとは幼なじみ。2004年に統合失調症と診断される。その3年後、若年性のレビー小体型認知症であることが判明、現在に至る。

出　演 ―― 石本浩市　石本弥生　石川真理
題　字 ―― 細谷亮太
撮　影 ―― 石倉隆二
音　響 ―― 米山靖
録　音 ―― 渡辺丈彦
編集技術 ―― 尾尻弘一
バンドネオン ―― 大久保かおり
コントラバス ―― カイドーユタカ
音楽協力 ―― 横内丙午
宣伝デザイン ―― 森岡寛貴（ジオングラフィック）
制作・上映デスク ―― 遠藤郁美
鷲見真弓
増馬則子
製作協力 ―― ヒポコミュニケーションズ
一隅社
ハチプロダクション
企画・製作 ―― いせフィルム
演　出 ―― 伊勢真一

助成：文化庁文化芸術振興費補助金

――愛する人が認知症になったとき、一体何が大切なのか。

誰の上にも起きる可能性がある認知症という病。
愛する人が認知症になったとき、
あるいは自分が認知症になったとき、一体何が大切なのか…。
この映画は、一人ひとりに深い問いを投げかけています。

妻の病
――レビー小体型認知症――

【レビー小体型認知症】
アルツハイマー型認知症、脳血管性認知症とともに、“三大認知症”といわれている。パーキンソン症状と幻視・幻聴体験、そして認知症独特の記憶障害がみられる疾患。「レビー小体」とよばれる異常物質が脳組織に沈着する。症状には波があり、鬱（うつ）症状もみられるため、同居する家族の精神的負担も大きい。

お問合せ　いせフィルム www.isefilm.com
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-3-7 青山N-ブリックビル3階
TEL：03-3406-9455　FAX：03-3406-9460　E-mail：ise-film@rio.odn.ne.jp